

■ ドル強気の展開が続く…

本欄の前回更新分では、一つに「ドル/円の月足チャート上における31カ月線と月足『雲』上限との関係性が最も注目される」と述べてきた。最大の焦点は「10月の月足・終値で31カ月線を上抜けるかどうか」にあったわけだが、下図に見るとおり、結果的には辛うじて終値で同線を上抜けることとなった。

思えば、今年1月以来長らく31カ月線はドル/円の上値抵抗として意識され続けてきた。そんな同線を上抜けたわけであるから、基本的には強気のシグナルと捉えていいだろう。振り返ると、2012年11月に月足が31カ月線を上抜けたところから、その後の大相場はスタートしたわけである。昨年(2016年)11月、12月にも一旦31カ月線を上抜けたが、これは「トランプ・ラリー」という特殊事情に拠るものであった。

もちろん、この11月の月足・終値も31カ月線より上方に位置することとなるかどうか、引き続き注視しておくことが重要である。また、さらに相場が強気になびいた場合には、次に一目均衡表の月足「雲」上限を上抜けるかどうかが注目される。目先は、まず直近高値の114.45円をクリアに上抜けるかどうか注目されることとなるが、同水準を上抜けて更に月足「雲」さえも上抜く展開となれば、あらためて昨年12月高値や今年1月高値が位置する118円後半の水準も視野に入ってくることとなる。

なお、少し長い目では来年の年明けあたりには月足の「遅行線」が26カ月前の月足が位置するところを上抜けるような展開となるかどうかという点についても注目しておきたい。



目下のところ、ドル強気の流れは米12月利上げ見通しや米税制改革に対する期待、総じて好調な企業業績と米株価の推移などに支えられているわけであるが、一方でユーロがこのところ軟調な展開になっていることもドルの価値を押し上げることに貢献している。

前回更新分では、先週26日のECB理事会を控えるなかで「一口に言って「やや期待外れ」なものとなる可能性が高い」と述べた。そして案の定、理事会の決定やドラギ総裁会見の内容は総じて市場の期待を裏切るものとなった。ドラギ総裁は、来年1月から資産購入量を減額する措置について、わざわざ「テーパリングではない」と断りを入れた。また、あらためて足下のユーロ高を暗にけん制することも忘れなかった。

結果、ユーロ/ドルは一目均衡表の日足「雲」下限や89日線をクリアに下抜け、さらに7月下旬あたりから形成されてきたと見られるヘッド・アンド・ショルダーズ・トップ（三尊天井）のネックライン水準（1.1660-70ドル処）をも下抜ける展開となった。前回は述べたように、かくなるうへは当面の下値の目安が相応に下がり、セオリーに基づいて考えれば1.1200-1.1300ドルあたりまで中期的に下押し可能性もあるものと見ておくことが必要となる。

(11月02日 11:55)